

# 「普通に働くことの大切さ」を教える

自己よりも対象、能力よりも努力、

結果よりも過程を大切にすることの仕事を観を育む

日本は崩壊するか

「大国の崩壊はドラマティックなことでは起こらず、故障してもすぐに修理されずに放置されるとき、治安が乱れるとかの、つまらない行政の怠慢から始まるものですよ」と、塩野七生さんが、文芸春秋平成13年12月号「日本人へーピンラディンにごつ勝つか」で述べている。この言葉からすると、我が国の崩壊はすでに始まっているのではないかと心配になるような出来事がこのところ相次いでいる。

普通の仕事が普通にきちんと行われることで我々の生活が成り立っているはずだが、日本人の仕事の仕方が、最近急激に変わってきて、そのところからはなはだ怪しくなってきた。

景気や財政、治安の悪化はもちらん大問題で、

その建て直しは急務である。しかし、仕事の心構えや職業倫理の崩壊も我々の生活を足許から崩すものである。このことを我々職業教育に携わるものはどのように受け止め、どのように対処すればよいのだろうか。

以下で筆者は、高度成長期以降の人たちの働き方に影響を与えている、いわゆる「自己実現」の考えが、本来の思想からかけ離れたものであることを明らかにし、若者たちに「働く心構え」をいかに教えるべきかを考察する。

「普通の仕事を普通にきちんとする」とは

では、筆者の言う「普通の仕事を普通にきちんとする」とはどのようなことか。大辞林では「普通」とは、「ごくごくにも、またいつでもあつて、め

井上宏

大阪女子短期大学 教授

(経歴) 一九三九年生まれ、大阪大学経済学部卒、ユニチカ株式会社を経て、一九九五年から大阪女子短期大学勤務

ずらしくないこと。また、そのさま。ほかとくらべて特に変わらないこと。また、そのさま。特別ではなく、一般的であること。また、そのさま」とある。とすると、「普通の仕事」とは、緊急事態や異常事態での仕事、滅多にやらないような仕事、特に責任の重い仕事、特に地位の高い仕事、芸術やスポーツの仕事などは含まないが、仕事の種類や地位を問わず、定型・非定型を問わず、多くの人が普段従事している仕事ということになる。それを「普通にきちんとする」とは、その

仕事に、また仕事相手から期待されている役割を、責任を持ってきちんと果たすことを意味している。発明やイノベーションは世の中を変革するが、「普通の仕事」は我々の日常生活を動かしている。と言つても、「普通の仕事」とは、決して命じられた通り、昔のやり方のままに仕事をするということではない。次に何が必要かを絶えず考え、仕

事を改善していくことも含まれる。そういう意味で、「普通の仕事」は我々の現在の生活を支え、明日の生活を準備するものと言えよう。ところが今、それが危機に瀕している。普通にやっけていては競争に勝ち勝てないぞと発破をかけられるその足許で、仕事のモラルが崩壊している。

## 「仕事のモラル」の崩壊

職業倫理欠如による犯罪の増加が社会を揺るがせている。本稿執筆時にも、雪印食品の不正事件が刻々報道されている。その上に、筆者が問題とするのは、不注意や怠慢による事故が多発していることである。

このところ、役人の不作為の罪が次々に明るみに出ている。国レベルでは、エイズでの旧厚生省の対応、狂牛病での農水省の対応がはなはだ怠慢であったことが報道されている。

地方でも、数年前の0157における堺市の対応、最近では明石市で、花火大会での陸橋上の大事故後すぐ、人工砂浜で人身事故が起こっている。これらは皆、数多の通報があり、対策の必要性が明らかであったにもかかわらず、有効な措置がとられないままに事故が起こってしまったものである。青森県の公社職員による巨額横領事件などは

元は不正であるが、長年チェックできなかったのは、怠慢以外の何ものでもない。

民間でも、医療機関における数々の事故がある。患者の取り違え、点滴ミス、器具の操作ミスなど、数え切れない。証券業界では、電通株やいすゞ株の注文インプットミスによる巨額の損害がある。これらはいずれも犯意がないにも関わらず、大きな損害を社会に与えている。

これらニュースに報じられたものは実は氷山の一角で、ニュースにもならない不注意や怠慢に基づく事故は、我々の周囲に満ち満ちだした。

筆者自身も、歯の治療で、歯科衛生士の処置ミス（殺菌不十分）のため、膿が歯茎から吹き出して苦しんでいる。近所の住人はコンタクトレンズ購入時、女性眼鏡士の長い爪で目を傷つけてしまった。眼鏡士が爪を伸ばすなど、信じられないことである。

筆者は先日あるレストランに入ったのだが、注文しようにも店員がなかなか来ず、いらいらした。清算時に聞いてみるとアルバイトが連絡もなしに休んでしまつて、人手不足なのと言つた。近頃の若い人は口が酸っぱくなるほど注意しても駄目なのだとのことだつた。

これらの困つた現象も、普段学生に接しているとなつて、なるほどと合点してしまつたのが情けない。社会に送り出して安心という学生が年々少なくなつているのだから。

いわゆる「自己実現」したいという風潮が非常に強くなった。好きな仕事をしたい。仕事は楽しくしたい。自分の能力を發揮できる仕事をしたい。そして、いやなことがあつたり、壁にぶつかりするとすぐに辞めてしまふ。これは本当の意味での「自己実現」ではなく、「自己中心主義」(ミイズム)である。

仕事での「自己中心主義」の増大と我慢の欠如が見られる。そしてこれは、仕事を蝕む、不注意や怠慢さらには不正などにつながつていく。その一方で、自分は何が好きか、どんな能力があるのか分からないということで、就職活動をしない学生が多くなつた。仕事への意欲そのものの減退である。

この「自己中心主義」は、後述するように、一つにはダニエル・ベルの言つ、「資本主義の文化的矛盾」がもたらしたものである。マズローの「自己実現」の思想も、商業主義により、「自己中心主義」に醜く変形してしまつた。そしてまた、それは、家庭教育の崩壊、学校教育の無力の結果でもある。

リストラ、就職難、フリーター・アルバイト・派遣社員の増加、さらには一日契約社員まで出現する仕事現場の激変は、仕事に対する意識をさらに混乱させている。

## 「自己実現」と「自己中心主義」

「自己実現」とは、広辞苑では、「自分の中に潜む可能性を自分で見つけ、十分に發揮していくこと、またそれへの欲求」と簡単に表されている。一般的には「潜在能力の發揮」「自分のやりたいことをする」「好きなことができる」などと捉えられている。そして、若者向け媒体は様々な自己実現への道を喧伝している。

しかし、そこに見られるのは、飽くなき自己への関心である。「自己実現」と言いながら、大辞泉による「ミーイズム」、すなわち「自分の幸福や満足を求めるだけで他には関心を払わない考え方。自己中心主義」の姿に他ならない。

平成13年6月16日、NHKで3時間に及ぶ視聴者参加番組「働く喜びって何ですか」が放映された。そこには、自己実現を求めて転々と職を変え、若者、就職を前にして、人間を歯車に扱った組織への不安にたじろぐ若者、反発から組織に入ることを拒否し、「ハッピー感」を求めてホームペーjジ作りを仕事にしようとする若者、何の職に就くことも拒否し「だめ連」を自称する者、様々な姿があったが、自分たちが世の中を支えるのだとの概を示す者は皆無だった。もちろん出演者が今の若者の姿を全て代表しているわけでもないだろうが、多くの若者たちの間に漂う気分を表して

いることは、筆者の普段接している学生たちの姿から想像できる。

マスローが、「人間の心理学」の中で表現する「自己実現的人間」の姿は、今一般に捉えられている「自己実現」の姿とはかけ離れたものである。マスローは、「現実をより有効に知覚し、それと快適な関係を保つ」「自己・他者・自然の受容」「自発性」「問題中心的」「超越性」「自立性」「評価が絶えず新鮮であること」「神秘的経験」「大洋感情」「共同社会感情」「深遠な対人関係」「民主的性情構造」「手段と目的の区別」「哲学的で悪意のないユーモアのセンス」「創造性」「文化に組み込まれることに対する抵抗」などの言葉で自己実現的人間を表現する。「彼らは、自己中心であるより問題中心なのである。一般的には彼ら自身が彼らの問題となることはなく、あまり自分のことで気をもんだりはいしない。」「彼らは、人類全般に対して、(略)ときどき怒ったり、いら立ったり、いや気がさしたりするにもかかわらず、同一視や同情や愛情をもっている。したがって彼らは、人類を助けたいという真剣な願いをもっている。」「自己実現者は、他のどんな大人よりも深遠な対人関係をもっている。彼らは、他の人々がそつでできると考えている以上にはるかに融和し、愛し、完全に同一視できるし、自我の境界を取り去ることもできるのである。」「もちろん、自己実現者は創造的であるが、それは「モーツァ

ルト型の特異な才能とは違ったものである。」「健康な子ども、純真で普遍的な創造性と同種のもの。」「この創造性は、本を書くとか、音楽を作曲するとか、あるいは、芸術的なものをつくるとかいう普通の形ではなく、」「健康な人格の表現として現実に投射され、あるいは、その人が従事している活動に何らかの影響を与えるようである。この意味では、創造的靴屋、創造的木工、創造的事務員も存在しうる」と述べている。

このような、マスローの自己実現者の姿が、何故、どのようにして今日のような自己中心主義者の姿に変容したのか。筆者は前述したように、一つにはダニエル・ベルの言う「資本主義の文化的矛盾」がもたらしたものであり、一つには、家庭教育の崩壊、学校教育の無力の結果でもあると考

## 資本主義の文化的矛盾による変容

ダニエル・ベルは資本主義が文化的矛盾を来とし、現代社会に重大な「方向喪失」を引き起こしているとする。資本主義はプロテスタントの倫理観を基礎に発展したにもかかわらず、その倫理観は「資本主義それ自体によって、密かに害されていった。」「倫理観を崩壊させた最大の兵器の一つは、分割払い販売法、あるいはクレジット・カー

ドの発明だった。「初期の資本主義社会システムは、大量生産と大量消費、新しい欲求とそれらの欲求を満足させる新しい手段の創造によって変形されたのである」。倫理観が崩壊したため「快樂主義だけが残された。資本主義システムはその超越的な倫理を見失った」。「大衆社会には、快樂主義が横行している。これは、資本主義自体のマーケティングのシステムによって、いやがうえにも刺激され続けている」。

資本主義は、人間が生産者として堅実な働き手であることを要求する一方で、その大量生産・大量消費のシステムの故に、同じ人間が消費者として欲求の固まりであることを必要とするのだ。

ベルは「資本主義の文化的矛盾」を著した1976年、この矛盾を西欧社会のものとして、日本の社会はかなり異なっていると見ていた。日本の犯罪発生率が非常に少ないのは、社会的なコントロールが強く、公共的な心情が強い社会である故だと考え、アメリカで起こっている文化的危機が、日本でそのまま起きると考えることは危険であると言っている。

しかし、残念ながら、日本の現状はタニエル・ベルの予想をはるかに超えてしまった。今や、個人の欲望の充足を最大限の目標にする、自己中心主義の風潮が蔓延、犯罪も鰻登りに増加し、凶悪化している。

一方、経済は「効率」と「イノベーション」を

重視する。そこでは、人間はトータルな存在として評価されず、効率とイノベーションを実現する「能力」によってのみ評価される。グロバルな規模で激化する競争は、人間の評価をますます偏ったものにしていく。

これらが相まって、マズローの自己実現の思想を歪めてしまった。自己実現といえば、自分の好きなことをすることだ。潜在能力を伸ばし他人を凌駕することだとの解釈がまかり通ることになってしまった。そして、あらゆる産業が、自己への飽くなき関心を商品化することに狂奔している。

## 家庭教育の変容

ある教師の言葉が印象的だった。「昔は父母と面談すると『うちの子は、とにかく丈夫で、人に迷惑をかけない人間に育ってほしい。できれば人の役に立つ人間になってほしい』と言ったものです。しかし、最近の親は大抵、『うちの子には、好きなことをさせてやりたいと思つ』と言います」。平成12年11月23日、NHKで作家村上龍を司会者として7時間に及ぶ教育に関する視聴者参加番組「あなたは子どもに、どんな人生を望みますか」があった。その番組中に視聴者から寄せられた電話である。

高度成長以来、日本の家庭教育の在り方が凄ま

じく変化してしまった。その結果、どのような親が育ったのか。岩村暢子は日本経済新聞平成14年1月17日夕刊「現代家庭の食卓調査」で、かつて「新人類」と呼ばれた世代が築く家庭では、上の世代と比べ、自分中心に考える傾向が強まっている。一般に家族のことを考えてするとされた主婦の食事作りにも、自分の満足感を求めることが多くなったとしている。氏はその原因を彼らの成育歴に求めている。「60年ころから日本は高度成長下のサラリーマンの父と専業主婦の母で形成する核家族を、そのスタンダードな姿とする時代に入った。家業を手伝ったりするより親から何かをしてもらうのが子供の日常となり、洋服、玩具、レジャーランド、おけいこことなど『お子様市場』が生まれる。遊びも上の世代とは変化。女の子の場合は子守や炊事など家事の模倣を中心とするまことから『お化粧品セット』『お店屋さんセット』『着せ替え人形』を使った消費の模倣になった」。そして、そのように培われた自分中心の感覚を無視しては、今の親子や家庭を語れなくなつたと言

う。

昔の子どもは、家事の手伝いなどを通じて、家族の中で何らかの役割を担い、他のメンバーに対し、それなりに責任を負っていた。また、他人に迷惑をかけないように言い聞かされていた。遊びの場でも、いろいろな年齢の子どもたちが一緒に

遊ぶことで、集団生活のルールや役割分担を勉強していった。それが高度成長期以降、少子化傾向の中で、親の関心は子どもを伸ばすことに移り、子どもは学習塾やお稽古事に追いまくらわれ、自分のことで一杯の生活に変わってしまった。遊びも、同年齢同士の集まりで、それぞれがバラバラにゲームをしているような、岩村の言う「消費」の遊びに変わってしまった。

このような成育歴は、社会に入ってからの仕事の仕方に当然大きな影響を及ぼす。自分にしか目が向かないということは、仕事の対象にきつちり目が行かないことである。相手を思いやった仕事ができず、手前勝手な仕事しかできないということである。人は成果主義に駆り立てられて懸命に働くが、それは自分のためであり、精々が自分の属する小さな組織のためである。誠意のある仕事の評価されず、大きな不正にもつながっていく。

## 能力主義のもたらす不安

「能力」といっても、会社が「能力主義」というときの「能力」と、俗説「自己実現」がいうそれは、もちろん異なる。会社のそれは効率を上げるための、イノベーションを起こすための仕事の能力であり、俗説「自己実現」においては、それも含むが、むしろ組織にしばられず、好きなこと

をして生きていくための芸術的な才能やスポーツの才能を指すことが多い。いずれにせよ、人はその能力で評価されるようになった。これは門地や年功による評価に比べ、はるかに平等で望ましいと思われている。機会は平等でなければならぬとされるが、能力による結果の不平等は当然であるとされる。そして、経済は能力主義を加速させている。

経済は人々の欲望を駆り立て、それを満たすために自己の能力を最大限に發揮すべしとする。しかし、自分の欲望や能力にはかり目を向けることは、かえって欲求不満を大きくする。欲望には限り無く、能力は生まれながらにして不平等だからである。

筆者は、社会全体が能力主義に染まることは望ましいことではないと考えている。仕事の場では効率向上は欠かせず、能力主義による分配格差はやむを得ない面がある。しかし、それが短期的な成果主義に陥ると、長期的にはかえって望ましくない結果を招く可能性があることは、よく認識されているとおりである。まして、人間の評価まで能力一点張りになることは、正しくないばかりか、社会不安の源であると考ええる。

少々脱線になるが、筆者は少年非行の増加の多くはこれが原因しているを見る。最近の子どもたちは幼いときに甘やかされ、全能感を持って大きくなる。それが学齢期にもなると自分の能力に気

付くことになるが、今まで描いてきた自己像と周囲からの評価との落差に耐えきれず、疎外感を抱く子どもたちが存在することになる。学校での偏差値教育はそれを加速している。自分を疎外するものに対する復讐が少年非行の大きな原因である。彼らにそれは悪いことだと言っても始まらない。彼らは周囲が悪いことだと思っているからこそするのだ。彼らの疎外感を取り除くことが必要なのだ。能力以外でも彼らを評価してやるのが大切だ。

## 資本主義の文化的矛盾の克服

このような原因による仕事の崩壊に対し、我々はどうのように対処すればよいのか。社会の枠組み自体の変革について、ダニエル・ベルは公共家族の理念をつち立てることを主張する。「経済的な自由主義は、産業組織の中に寡占状態を生みだし、私的な欲望の追求を通じて快樂主義を生み出した。これは社会的なニードに心えるための障害となっている。しかし、われわれは二つの自由を分離できるはずだ。われわれは、ブルジョア的な欲望の勝手気ままな追求は、道徳的な基盤を欠いているとして退け、一方、個人の国家権力からの自由と個人の努力や功績に対する適切な報酬を確保するため、政治における自由主義は保持していかなければ

ればならない。市場を通じては、この両者を調停できない。市場は制度として考えられるべきで、公正の原則を示すものだと考えるべきではない。この調停をするものは公共家族である」と。

ベルの言う公共家族の概念とは、社会を結び合わせるものを政治体制の内に見つけたそうとする努力である。政治と経済の再統合である。そして、それには三つの行動を合わせる必要がある。まず第一に、われわれの過去からの遺産を肯定し直すこと。第二に資源の有限性を認識し、二ードの優先順位を見いだすこと。第三は、すべての人に正義の感覚と社会への帰属意識を与える公正の概念について、合意を作り出すことであると言っている。

アメリカにおいて、ベルが「過去からの遺産」というのは何か。それは、「勤勉、労働、肉欲に対する抵抗、などを重視したプロテスタンティズム」である。では日本におけるそれは何か。ロナルド・ドーアは「日本型資本主義と市場主義の衝突」の日本語版への序で、「人がなせ一生懸命に、良心的に、創造性と起業家精神を發揮して働くのかと問われれば、お金はその理由のごく一部にすぎない。努力の説明にはいろいろの条件が関係してくる。仕事自体の充実感ばかりでなく、社会構造や人間の働く環境となる組織構造、その権力・報酬の配分がどれほど公正なものとして見られているか、あるいは友情、職場の結束、取引関係や

その他の社会関係から生まれる義理など、そういう人間の共同生活の側面を、英米の社会より日独の社会の方が重視すると思う」と述べている。まさに今、英米型市場主義の荒波の中で失われようとしている、この日本社会の特色の中で、我々は何を残し、何を变えるべきかを見極めねばならない。

## 普通に働くことの大切さを教える

では、教育において我々は具体的に何をすれば良いのか。仕事観を昔に引き戻す必要がある。いわゆる自己実現を可能にする仕事ではなく、世の中の役に立つ仕事が良い仕事であると教えなければならぬ。そのためには、家庭における「しつけ」の復権と、家庭や学校・職場での評価基準の変更が必要であると考ええる。

家庭は子どもを甘やかさず、子どもにも家事の一部を手伝わせ、家族の一員としての責任を覚悟させるべきだ。「子どもの仕事はお勉強」などといって、家事を免除することはやめるべきだ。家事をすることにより、その大変さを知り、自分の生活が如何に人のお陰をこうもっているかを知る。家事は責任感を植え付けることに役立つばかりでなく、仕事の段取りを考える訓練ともなる。整理・

整頓は情報管理の仕事につながっていく。社会に入ってから仕事にも大いに役立つのだが、これについては紙数がないので別稿としたい。

家庭や学校は「好きな仕事でなければいけません。楽しい仕事でなければいけません」という風潮を改めさせなければならぬ。すでに志望を持っている学生は良いとして、そうでない、取り立ててやりたいたくもない特別な才能もない学生に対しては、「本当にあなたに向いている仕事があるはずだ。何もないはずはない。本当の自分をよく見つめてごらん」と自己分析を強いることはそろそろ止しにしたい。向いているかどうかは仕事に就いてみなければ分からないのだ。世のため人のためになる仕事なら、そして、絶対いやというのでなければ、どんな仕事でも挑戦するよう指導するべきだ。平成13年内閣府「国民生活に関する世論調査」によると、20～29歳男女の「理想の仕事」は「自分にとって楽しい仕事」だといつ(男53%、女61%)。しかし、どんな仕事も楽しいことばかりではない。苦しくても、自分なりの工夫で壁を乗り越えることにより、面白さが見えてくるのだ。働く喜びとは何かを教えなければならぬ。

脚本家として活躍する大石静は、日本経済新聞平成14年1月4日夕刊「2002女性三元気の処方箋」で、「私だって、この仕事をしていて、わあ、楽しいなんて思わない。台本を投げ返されたことだってある。しんどいことの方が多から、今の

「仕事は本当に好きなのかどうかも分からない」「どんな職業でも99%はつらいことばかり。99%の現実には押し倒されそうになる。でも、残りの1%だけ、周りから評価されたり、なにか達成できたりして、ああ、仕事を続けていて良かったなんて思う時間がある。その時間をどれだけ、じんわりとかげがえのないものと感じるかどうかではないか」と発言している。本当の自己実現は苦勞した結果、得られるものだを教えた。

何か夢中になれることを持つのは素晴らしい。しかしそれは手をこまねいていてもやって来ない。まず社会に参画すること、その中で格闘することが大切だ。夢中になることは、その中に見つけることもあるし、その仕事に関係する、様々な出会いの中に見つけることもある。

その時必要なのは、人の役に立つという姿勢と努力だ。大きなことは考えなくて良い。「一隅を照らす。これ則ち国宝なり」という言葉がある。

(最澄が「山家学生式」で、古人曰くとして引用した言葉)。大きな力はなくても、どんな仕事でも、一隅を照らすことなら、充分できるところではないか。

現在は、「人のため」などと言うと偽善だと受け取られるような世の中だ。確かに人間は本来利己的なものであることを筆者も認める。リチャード・ドーキンスは、人間は「利己的な遺伝子」の乗り物にすぎないと言った。しかしドーキンスは、

その遺伝子も長い腕を持っていると言っ。つまり、仲間の利益を考えた振る舞いが個体にとっても有利であることを知っていると言っ。人間は利己的なものだが、それをコントロールするのが理性であり文明である。自我を抑えられたときには解放を叫び、行きすぎたときには抑えるのが理性の選択である。

家庭も、学校も、職場も、能力によってのみ人間を評価することを改めねばならない。人間を全体として見なければならぬ。子どもを能力のみによって評価することは、彼らに疎外感を抱かせるものであることは前述した。能力の差は本人には如何ともし難いものだが、努力においては平等である。それらを含めた全体で評価することで彼らを輪の中に入れることが可能ではないか。一方、企業がそのメンバーの能力や成果を問うことは当然だ。しかし、公平な評価は難しく、短期的に成果を求めることはエンロンや雪印食品の破綻につながって行く。何事もバランスが肝要である。

世の中には、ジャック・ウェルチやカルロス・ゴーンも必要だろう。イチローや佐々木の仕事も素晴らしい。しかし、普通の仕事を地道にやっている人たちがいて世の中は成り立っているのだ。それに、カルロス・ゴーンの「ルネッサンス」を読んでも、ゴーンは決して己の功名を求めた人ではないし、日産の復活は各部署の自己中心主義・部署間のセクシヨナリズムを取り払うことで成功

したので。

普通の仕事を、責任を持ってきちんとする。自己よりも対象、能力より努力、結果よりも過程を大切にする仕事観から、真に住み良い社会が実現すると考える。

最後に、先日、相田みつをさんの、こんな詩を見つけたので紹介する。

なんでもいいからさ  
本気でやっころらん  
本気でやれば  
たのしいから  
本気でやれば  
つかれないから  
つかれても  
つかれが  
さわやかだから

そして、それが世の中の役に立つことだったら、どんなに素晴らしいことだろう。(完)